

「ゲツセマネの祈り」

2014年11月25日

マルコによる福音書 14 章 32 節～42 節。一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

祈りは心の全てを神に打ち明けることである。打ち明けて、心が空っぽになると、神から与えられる平安に満たされる。パウロはフィリピ書 4 章 6 節、7 節で「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」と書いている。主イエスは祈りの人であった。上記のゲツセマネの祈りは、主イエスの生涯の中で、最も深刻な祈りである。「ひどく恐れてもだえ始め」、ルカ福音書には「汗が血の滴るように地面に落ちた」と書いている。このゲツセマネの祈りは「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります」という神への呼びかけから始まっている。「アッパ」とはアラム語で「お父さん」という意味である。主イエスは神に「お父さん」と親しく呼びかけ、あなたは何でもおできになりますと全幅の信頼をもって祈り始めた。そして、祈りの本題は二つである。第一は「この杯をわたしから取りのけてください」という祈りである。「杯」は神から負わせられる使命を意味し、ここでは、十字架の死を指している。だから、十字架の死の使命を取りのけ、十字架の痛みから救ってくださいと祈っている。死を決意してエルサレムに上って来たのだから、今さら、十字架を取りのけてくださいと祈るのは矛盾する。しかし、十字架の死の痛み、恐怖を知る主イエスは、これから救ってくださいと率直に、真剣に心の全てを打ち明けた。第二の祈りは「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」、私の願いはどうでもいい、あなたの御心が実現しますようにという祈りである。第一の祈りをひたすら祈り続け、心が空っぽになった後、第二の神に委ねる祈りへと変えられた。この二つの祈りの間には、激しく、長い苦悩の時があった。心の思いを全て打ち明けた後、平安な心で神に委ねる信仰が与えられる。究極の祈りの姿である。主イエスの苦悩を極めた祈りの間、弟子たちは目を覚ましていることができず眠り込んだ。私のために祈ってくださる主イエスを凝視できない自分の弱さを見る。